

「草の根外交50年」

原 富士男

- 1) 1920年 青森県八戸市で出生、父原 易三は房州吉尾村の出身、鴨川の医師（故）原 進一は父の甥 旧制八戸中学、東京外語、東北帝大を経て1944年外務省入省。その後まもなく陸軍に召集され、中国の内蒙古戦線に送られるが、まもなく終戦、閻錫山率いる山西軍に投降する。帰国についての所属部隊と山西軍との交渉は、小生にとって貴重な経験となった。一年後に帰国、外務省に復帰する。
- 2) サンフランシスコ平和条約締結後、1953年最初の任地としてシンガポールに赴任する。仕事はもっぱら大東亜戦争の後始末、戦時中日本はシンガポールを昭南島と名称を変えて、南方での中心基地として占拠していた・・・戦争の冷酷さが身にしみるが、他方その中に人間同士の「情」が残っていることを痛感した。
- 3) 二年後帰国し、中国、ソ連、東欧諸国など共産圏との貿易、経済関係を担当した後、東欧チェコ（当時はチェコ・スロバキア共産主義国）に赴任する。対共産圏貿易を担当しながら、中国とは国交が無く訪問する機会は無かったが、チェコは勿論ソ連をはじめとする周辺共産主義国の統治の実態に触れたことは有意義であった。
- 4) チェコ在勤3年の後、帰国中国課長に任命される。当時、日本は蒋介石の国民党統治下の、「台湾」の中華民国と国交を持ち、大陸の毛沢東統治下の中華人民共和国（中共）とは国交が無く、人的往来もきわめて少なかったがある程度の交誼を持つことはあった。中共が先々日本にとってきわめて大きな存在となるべきことは、否定すべくもなかった。半数が、中共担当、半数が、台湾担当の中国課員とともに対立する兩岸と多岐にわたる分野で接触を試みたが両者の間にあって特に中共との接触の難しさを味わった。
- 5) 五年後、台湾に日本大使館の次席として赴任する。台湾はもともと大陸から移ってきた蒋介石総統とその部下全て外省人の国民党独裁時期であり、他方中共では毛沢東の発動した文化大革命の最高揚期であった。中共としては軍事は勿論他の分野でも台湾への干渉の余裕は少なく、台湾にとっては比較的平穏な時期だったが、国民党の独裁化でもともと台湾に住んでいた台湾人は、息を潜めて暮らしていた。
- 6) 2年後、イスラム回教国パキスタンの最大都市カラチに総領事として転勤する。赴任後まもなくインドに周辺を囲まれている東パキスタンにサイクロンと称する大洪水が襲来する。当時死者100万と報道されたが、最終的には17万という数に公表されている。その1年後、インド・パキスタン第

3次戦争が勃発する。カラチへのインド空軍の空襲が激しく在留邦人の大部分を帰国させる。一ヶ月足らずでヒンズー教国インドが勝利するが、東パキスタンはその力を借りて独立を果たす・・・バングラディシュ人民共和国の成立である。在勤中は宗教のもつ因縁良くも悪くも、その伝統と力量に圧倒される思いであった。

- 7) パキスタンから帰国し、内閣調査室勤務を経て、当時の英領香港に総領事として赴任する。ちょうど日本が中共を中華人民共和国として承認し、国交を開いた時期であった。中国の文化大革命も始まってからやがて10年・・・1976年周恩来総理および毛沢東主席の死により終息に近づく。香港在勤中は、中国旅行を含み中国内状況を視察する多くの機会を持つことができた。この年グアテマラに転勤することになる。
- 8) グアテマラは1960年ごろ始まった内戦の最中、表面は静かなようだったが着任した頃から、状況は悪化してきた。ちょうど、グアテマラに到着した日、駐エルサルバドル大使がゲリラに拉致され、数日後に無事釈放されたが、10年前には米・独グアテマラ大使が内戦に巻き込まれ暗殺されたことがあった。この地域での最大の問題・・・内戦の原因もさかのぼれば原住民の後裔人口の70%のインディオと10%の白人の生活水準のあまりに大きな違いがあったように思う。ゲリラの蔓延をいかにして食い止めるか、これが私のグアテマラ滞在の最大の設問であり、その方向で本国政府に訴えて努力したことが忘れられない。
- 9) ポーランド・・・「連帯」の暑い夏（1980年） グアテマラ在勤終わってポーランドに着任すると同時に、その後10年足らずソ連東欧共産圏の崩壊で20世紀の世界を揺るがす端緒ともなった「連帯」運動がポーランドの北端グダニスクから発足し、ポーランド全土を覆う民主革命を求める国民的運動となる。ソ連指揮下の共産主義政権ポーランド政府はこれを抑えようとするが、運動はいつそう活発化し、政府は戒厳令を敷き軍事力をもってこれを抑える・・・これに対応する各国政府の対応を一瞥することとなる。この運動の首謀者であったワレサ氏が後にポーランド共和国大統領となり、日本を訪問することは人の知ることである。

10) ここで2度目の台湾在勤（最後の在外勤務）となる。外務省を辞任し「財団法人交流協会」の台北事務所長に任命される、1983年。台湾は、その8年前に蒋介石総統が死亡し蔣経国が後継者として総統職についていた。台湾の社会には第一回の台湾勤務の際に比べて大きな変化があった。最大のものは、かつて外省人に抑えられてきた台湾人の人間的地位の向上そして自信の回復であったとおもう。台湾人の絶え間ない努力が生み出した経済的發展と、民主化への地味な努力に基づくものであろう、この点では蔣経国総統の残した実績も大きかったといわれる。1989年蔣経国の死に伴い、李登輝氏が総統職に就く。人格的にも知識能力という点からも国際的に最高の人物・・・台湾の今日の繁栄と力量をもたらしたが特にわが国日本に対する氏の格別な思いに感謝したい。